# 文化

## 沈黙に向き合う〈27〉

沖縄戦 聞き取り47年

石原 昌家

### 「正規軍全滅後が出番」

### 占領下の秘密戦も想定


琉球新報
ベトナム難民27人漂着
与那国 久部良港
日本本土への脱出途中
着のみ着のまま
食糧切れ寸前
〝譲歩案〟の扱いが焦点
政府・自民にあせり

与那国島にベトナム難民が漂着したことを伝える1977年5月2日付琉球新報の記事

乳飲み子を含む27人のベトナム難民が、約3トンの小船で与那国島の久部良港に漂着（1977年5月1日）していなかったら、79年12月に私は与那国島で陸軍中野学校出身のS・Kさんに出会うことはなかった。その経緯については前回（9月26日掲載）記したところである。

S・Kさんは、諜報特務機関員として海外で暗躍中、「水晶発振器」をポケットに常時忍ばせていたので、それを用いて（その通信の可能性について東京工業大学出身の友人に電話で確認した）フィリピンに赴任途中の小野田寛郎元少尉が沖縄にいることを通信傍受して知っていたという。それは前回紹介した「琉球新報」の「81年5月6日、HK陸軍中野学校取材班コピー」によると、小野田寛郎と末次一郎（旧名始）は、（俣一）会員として名を連ねている。2人は中野学校での同期生だったのだ。同書に2人とも回想記を残し

### 中野の精神

末次一郎氏（青少年問題審議会会長）の案内で、ルバング島の旧日本兵・小野田寛郎さん（59）が、夫人とともに西銘順治知事を表敬訪問した」という記事（同日夕刊「えんぴつ横丁」）によって、S・Kさんの証言が裏付けられた。

ここで、S・Kさんや小野田元少尉が所属していた陸軍中野学校について触れておく。

### 中野学校の中身

俣一戦史刊行委員会『陸軍中野学校 俣一戦史―二俣分校第一期生の記録』（1981年、俣一会）《N

ている。

「中野は語らず」といわれ、秘密のベールに包まれてきたが、私の知る限りでは、中野学校を1960年から61年にかけて『週刊サンケイ』誌に連載した記事が、畠山清行著『陸軍中野学校』（番町書房）六巻本として、71年から74年にかけて出版されている。

それは、「密命！離島残置諜者の勇士たち！大陸に、南海の島々に、挺身隊となり、残置諜者となって密命を帯び、任務遂行のために、死地にとび込んでいった陸軍中野学校出身者たち！彼らの果たした役割は

既刊本などから中野学校のカリキュラムや目的を知ることができる。

陸軍中野学校そのものは、1938年から45年の敗戦に伴う閉校までに2500人余の卒業生をだして、世界各国で情報収集活動の任務に就かせていった。その実体については、軍の内部においても一部の関係者にしか知られていないので、ましてや一般国民はその肉親でさえ皆目知らないといわれている。また、単独行動が多かったので、同期生同士でもお互いの活動内容は知らないのがほとんどだった。したがって、

は？」という帯広告のもと、諜報戦史、秘密戦史、ゲリラ戦史などのサブタイトルもつき、中野学校の全貌があるていど見える。その後、中野学校の書籍はいくつか出版されており、それらの

いっさいの「名利を求めない」生き方が基本だった。

1940年8月に創設された「陸軍中野学校」の前身は、38年に秘密戦士養成機関の「後方勤務要員養成所」で、「外国に死ぬまで住みついて、その土地の人間になりきって情報を送り続ける」とか「外国に協力者」を作って情報を入手する方針もとっていた。しかし、実際は戦局の変化で、当初の計画通りには進まなかった。

帝国日本の軍人の心得は、「生きて虜囚の辱めを受けず」「捕虜になりたる場合必ず死ぬこと」といわれてきたが、中野学校の戦士は、正規軍部隊が全滅した後こそ自分たちの出番ということを徹底的に植えつけられていたので、「自死」などはありえなかった。

### 授業科目

学校の教科は、一般教養基礎学として、国体・思想・統計・心理・兵器・交通・築城・航空・海事・薬物学と戦争・日本戦争論に外国事情（軍事・政治・経済・その他）はソ連（軍事攻

略・兵要地誌）、ドイツ、イタリア、米英、フランス、中国（兵要地誌）、南方地域（軍事）、語学は英語・ロシア語、支那語、専門科目は諜報・謀略・防諜・宣伝・経済勤務、経済謀略、秘密通信法、防諜技術、秘密兵器、破壊法、暗号解読、実科として秘密通信、写真・変装・開錠術などである。さらに、占領地行政・武術や忍法など多種多様な内容が組み込まれている。

帝国日本の組織的戦争遂行は、45年の半ばごろまでと判断し、以後はゲリラ戦に移行するだろうと、44年8月に陸軍中野学校（俣分校が開校された。そこで「国内遊撃戦の参考」のもとに戦局の破局を想定した遊撃戦（ゲリラ）、離島残置諜者（工作員）教育や敗戦後の占領下における秘密戦も想定していたが、それは中止された。沖縄での秘密戦中止については後で述べる。そして生き残った中野学校出身者は各地での持ち場で、「中野の精神」のもと日本の再健に心砕いていったという。

（次回は26日掲載）